

五 カシミアの『糸』の話

【糸とは】

繊維の束に撚りをかけて長くしたもの

ニットを編むのに欠かせない糸。素朴な疑問ですが、糸ってなんでしよう？

糸とは『ある程度の長さで細さの繊維を束ねて撚りをかけて長くしたもの』だそうで、莫と
した言い方ですが正式な定義がないそうです。

一般に糸より太いものを紐（ヒモ）と呼んでいるし、縄はもつと太い。でもどの太さを糸
と呼んで、どこからヒモになるのかはわかりませんね。

細い糸、太い糸、柔らかい糸、硬い糸。これも個人の感覚の問題ですね。かようにこの世
界はかなりフアジイなことが多い業界です。

糸の原料である天然の繊維の一本一本はそんなに長くはありません。

カシミアは十〜九十ミリとかなりのばらつきがあり平均しても三十ミリ前後、ウールで
一番長い羊でもせいぜい百ミリぐらいです。綿は三十〜四十ミリで超長繊維と呼ばれます。
そんな繊維の塊が綿（わた）で、その綿をそろえて撚りをかけるとひっぱっても抜けません
ね。これが糸です。

【カシミアの紡績】

ゆっくりゆっくり効率の悪い糸づくり

カシミアの糸作りを極々簡単に言うと、一定量の原料をそろえて（カーディング）した後
に撚りをかける（ミュール）ことが糸づくりの基本です。

染めて、ブレンドされたカシミアの原料が巨大なカード機でカードされる光景は圧巻で
すが、わたの塊を櫛で何回も何回も丁寧にブローしているようなものです。紡績の基本はど
の素材でもあまり変わらないと思いますが、カシミア専門の紡績はスピードが遅く、丁寧に丁
寧にカードしています。この効率の悪いスピードの遅さも繊細なカシミアの繊維を切らな
いようにする配慮なのです。

【ニット糸と織物糸】

ニットは撚りが甘い

繊維の細さと長さを求められるニット糸

ニットの自慢話になってしまいそうですが、天然素材の原料で糸を作る（紡績する）とき、最も良い原料を使うのはニット糸、と言うのはあまり知られていません。

糸を作る（紡績する）基本は『原料の繊維を束ねて撚りをかける』と以前お話ししましたが、糸は、撚りを強くかければ強くかけるほど丈夫な糸を作ることが出来ます。

しかし、ニット糸の場合はふんわりした風合いが命ですから強く撚りをかけることが出来ません。

強い撚りをかけられないので一本一本の原料の繊維が長くなければ抜け（素抜け）してしまいます。

ふんわりした糸を作りたいので強い撚りをかけられないから『長い繊維の原料』を使うしかありません。当然その長く細い原料は高価なんです。

ウール、特に紡毛と言われるカシミア、羊、アンゴラ、モヘヤ、キャメル、アルパカなどはそれぞれの特徴があります。

羊は、繊維が長く適度なクリンプがあるのでニット糸でも織り糸でも万能。

アルパカは、ぬめりのある柔らかさで、クリンプが少なく毛が素抜けしやすく、抜け毛が他の生地につきやすい。

アンゴラは、柔らかいがこしがなく切れやすく、埃のように飛び散る。

モヘヤは、発色がよくストレートな繊維なので伸度が弱く編むのに苦労する。

カシミアは、抜群の柔らかさと軽さがあるが、繊維が細く切断しやすいので製造の効率が悪い。

等々、動物の違いだけでなく繊維の長さをはじめ撚りの回数などで違いが出るので深い知識と経験が必要です。

生地になってからが勝負のカシミアの織物

一方、織り糸の場合はかなりの撚りをかけてしっかりした糸を作ります。縦糸を張り、横糸を通しながら織り込んで、その上に箆で詰めて一枚の布にするので糸はしっかり丈夫でなければなりません。その為には撚り回数を多くして引きに強い糸にする必要があります。

カシミヤの織物はその生地 of 表面を引っかけて毛を立たせて独特の織り地を作ります。その毛羽立ちの良さが布地の評価を大きく左右します。

昔から生地を引っかけて毛羽立たせるのには、あざみ科のチーゼルの実を乾燥させたイガイガを使ってきました。あざみのイガイガがあたりの波打つようなカシミヤの生地を生み出していたのはびっくりですが、そのためにヨーロッパの高級生地生産工場では自家栽培でチーゼルを育てていたんです。この頃は金属製の代用品もあるそうですが、やはり天然のあざみの実には勝るものはないそうです。

その毛羽立ちの技術を誇るかのように、カシミヤの織物のメーカーにはあざみの実のマークをよく使っています。カシミヤ織物の代表と言われるロロピアーナのマークにもあざみの実がデザインされ、カリアッチなどはもろにあざみの実のマークです。

このように同じ原料の繊維を使っても糸に対する要求が違うので原料の選び方もちがってきます。

【CCMI をご存知ですか】

錚々たる顔ぶれはカシミヤ紡績業界のワールドカップ

『UTOは一枚一枚丁寧な物作りが真情というのは分かるけど、素材のカシミヤのグレードはどの程度なの？』と聞かれることがあります。説明しにくいんですが、次のように説明するとほとんどの人に合点して頂けます。

CCMI、(カシミヤ&キャメルヘア・マニユファクチャラーズ・インスティテュート) という高級な糸を紡績している世界的な協会があります。二十社にも満たない数ですが錚々たるメンバーです。

ざっとご披露すると、イタリア代表は織物では世界一といわれるロロピアーナ。ゼニアは有名ブランド等に糸を供給しているし、カリアッチもカシミヤでは超有名な会社です。英国のドーンソンは元バラントインやプリングルの親会社ですね。早い話がカシミヤなど、こだわりの高級糸を作る世界的な紡績会社の集まりなんです。

日本代表は二社で、東洋紡糸工業と深喜毛織です。東洋紡糸工業は日本で最初にカシミヤを紡績した歴史を持つ会社で、世界中の紡績仲間から最高のニット糸を作る会社と評価されています。UTOのカシミヤはその東洋紡糸と深喜毛織の糸を使っています。

『ふくん。同じ世界最高クラスの原料を使っているなら、有名ブランドはン万円もするのに、どうしてUTOはそんなに可愛い値段なの？』それを言われたら一言もないのが・・・。世界最高峰の原料を使って、ヨーロッパ勢には絶対に負けない日本人の手による

丁寧な物作りをしていると自負しているんですが、もの作りにかかるコストより宣伝やコレクション費用等の付加価値の付け方や流通の違いだと思っています。一番の違いはU T Oは自社での企画製造販売という流通の短さだと思っています。

『イカサマは許さない』と目を光らせるCCMI

CCMIが知られるようになったのは、カシミア混率問題です。百貨店や有名ブティックでカシミア百パーセントと表示されて販売されたカシミアの混率が、公の機関で調査したら実際の内容と違うということで、経済産業省から排除命令を受けて大騒ぎになりました。

カシミアは高価なゆえに悪徳業者に狙われる素材です。自分の取引先は信頼できてもその人が騙されていたら皆が被害者や加害者になりかねません。だから原毛から製品まで素姓のはっきりした信頼できる相手との取り引きが何より大事です。

【糸のロット違い】

同じ色の糸でも使えないことがある

染めの話で、カシミアは五〜六色をブレンドしてワタを作る話をしましたが、このブレンドしたワタを紡績します。染と紡績で一セットですので、糸には必ず紡績のロットナンバーが記載されています。

カシミアニット作りで必ずチェックするのが紡績の『ロット』で、このロットナンバーを合わせないと大変なことになってしまいます。

ロット違いで一番困るのが色違いです。同じ色でもロットが違っていると微妙に違うのです。糸（コーン）どうし比べても全く分からなくて、同じ色だからと油断して途中から違うロットの糸で編んでも人間の目は微妙に違うことを見分けてしまうんです。人間の目って凄いです。